



Title	一九世紀後半の英國におけるインテリアの位置
Author(s)	北村, 仁美
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 14-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

一九世紀後半の英國におけるインテリアの位置

北村仁美
Hitomi Kitamura

二〇世紀前半に興隆した新しい建築やデザイン運動の騎手たちによつて、機能的でない、ブルジョワ的、と批判されてきた一九世紀後半の英國における室内を、「住まい」として考えることには違和感を覚えるかもしれない。しかし、二〇世紀前半と比べればかなりゆつくりとしたスピードで規模も小さかつたであろうが、産業構造の変化について生じたさまざまな社会や生活の歪みに多くの人々が気づき始めていた頃であった。このことを考えれば、一九世紀後半の英國でこそ、住まいへの関心が近代において初めて高まつたということができるのかもしれない。本稿では、住まいあるいはインテリアへの関心の高まりという視点から、ともすると個別に語らがちなアーツ・アンド・クラフツや唯美主義の動きを捉え直し、この時代の英國におけるデザインやアート、装飾藝術をとりまいていた状況や相互関係の一端を描き出してみたい。

住まいへの関心の高まり——ウイリアム・モリスとレッド・ハウス

世界に先駆けていち早く産業革命を成し遂げ、未曾有の発展を遂げていた一九世紀後半の英國の都市ロンドン。地方から都市へと人口が流入し、都市の人口が一気に膨れ上がる一方、悪化する街の生活環境や過密状態から逃れ、よりよい環境を求めて郊外へと向かう人々が新しい住まいを建て、ロンドンの都市の輪郭を外へ外へと押し広げていった。国勢調査によれば、一八〇一年のロンドンの人口はおよそ八八万人であったが、一八六一年には約二七〇万人、そして一八八一年には四〇〇万人に達していた。こうした人口増による住宅需要の増加と宅地の急激な拡大の様子は、当時の文献にも次のように記載されている。

ロンドンは街ではなく広大な田舎になりつつある、という見解を示したフランス人は、何も单なる誇張を口にしたわけではない。一八〇〇年から一八六〇年の間に、この大都市は、前世紀の終わりに想定されていた大きさの二倍どころか三倍にもなった。「中略」平均して、およそ一〇〇〇軒の家が毎年新たに建てられている。そして、

あらゆる方向に急速に建物が広がっていくので、春に歩いた草原がクリスマスにはごみごみした通りになつてゐることに誰も驚かない。[四]

新しく住居が建てられると、建物にあわせ扉や窓、壁紙、家具、カーテンや絨毯などさまざまな生活の道具にいたるまで、新しい住まいは量産された調度品や日用品で満たされた。このような状況を背景に、この時代の人々の意識の中では、いかに住むべきかという課題が大きくクローズアップされるようになつていて。

モダン・デザインの父ウイリアム・モ里斯 William Morris (一八三四年) は、ケント州の北、クレイ川流域のゆるやかな谷あいに広がる果樹園のなかに友人の建築家フリップ・ウェッブ Philip Webb (一八三一年一九一五年) の設計で自邸「レッド・ハウス」を建てた。モダン・デザインの源流の一つとなる場所としてつとに知られているが、新築されたこの建物にモリス夫妻が入居したのがちょうど一八六〇年。拡張する都市と住宅の時代の出来事であった。この家を英国中でもっとも美しいものにしようとしたモリスは、家が出来上がってみると、その室内も、家具を配置し装飾するためのあらゆるものが同様にデザインされ作られるべきであるという点に気がつく[五]。ペルシャ絨毯や日常で使う陶器の器といった、当時モリスが自分の家に置いてもよいと満足できたわずかな既製品を除けば、大量生産された市販の製品にはどこにも、モリスの審美眼に適うものはなく、椅子やテーブル、ベッド、布、壁紙、タイル、カーテン、ワインを入れるためのジャグや、それを飲むためのガラスのコップさえ、新たに考案されなければならなかつた。

こうしてモリスは、一八六一年に友人たちとモリス・マーシャル・フォーカナーハウスを立ち上げ、ステンドグラス、家具、タイル、刺繡といった身の回りの品々のデザインに身を投じていくことになる。現状に飽き足らず、よき住まい方やより現代の生活感情に寄り添うものへの飽くなき探究は、いつの時代でも「ものづくり」の最も強いモチベーションの一つではないだろうか。

一九世紀の機械化の進行を、生産者の時間を搾取し、かつ、そこからうまれた製品を使う人々の生活にも悪影響を与えるとして、当時の批評家ジョン・ラスキン John Ruskin (一八一九年一九〇〇) は激しく攻撃した。モリスに先立つ

て、ラスキンは、機械に乱されていない中世の優位性を説き、仕事に喜びをもたらし、美しいものを生み出す手仕事の復権を唱え、ゴシック・リヴァイヴァル運動を力強く牽引した。ものづくりにおける手仕事を重んじ、中世の手工業ギルド（親方・職人・徒弟から組織された生産者団体）のような共同体によって生活に関わるものを生み出そうとする活動は、モリス以後も、アーサー・ヘイゲイト・マクマード Arthur Heygate Mackmurdo (一八五一年一九四二) のセンチュリー・ギルド (一八八二年設立)、ウイリアム・リチャード・ルサビー William Richard Lethaby (一八五七年一九三一年) をはじめとする若い建築家たちが集まって一八八四年に設立したアート・ワーカーズ・ギルド、チャールズ・ロバート・アッシュビー Charles Robert Ashbee (一八六三年一九四二) が一八八八年に設立した手工芸ギルド等へと受け継がれ、一九世紀末の英國の社会改革の思想や造形に豊かな実りをもたらした。この一連の動きが、アーツ・アンド・クラフト運動である。

アーツ・アンド・クラフト運動の歴史は、一面では、装飾藝術と関心を広げたデザイナーや工芸家、建築家、画家たちといった、主に、ものを創造する人々の歴史として捉えることができる。一方、機械化によりもたらされた弊害について、家具や日用品を購入しそれを家庭で使う人々（購買者、消費者）に向けて具体的に提案を行つたのが、チャールズ・イーストレイク Charles Lock Eastlake (一八三六年一九〇六年) の著作『家庭の家具調度等の趣味への助言』(一八六八年、以下『助言』と略す) であった。一般家庭のインテリアに関する本書を手引きとしながら、室内というフィルターを通してみると、一方が粗悪な機械製品が横行する時代に手による良質なものづくりを取り戻そうとする動きに対し、もう一方は芸術至上主義と、対極的に捉えられてきた、アーツ・アンド・クラフトと唯美主義の双方を橋渡し、関連づけそして理解する糸口も得られるよう思う。

住む人々への助言——チャールズ・イーストレイク

大きな問題であると考えていた。『助言』を出版した動機もここに起因するようだ。産業に関することは、芸術とはまったく別の論理に基づくという考え方からくる人々の無関心が、日用品のデザインの向上にとつて障害になつていて、と次のように指摘している。

この国でデザインを改革しようとする試みに対する最も大きな障害は、おそらく趣味に定評ある人々でさえ、あまりふれた産業品を見慣れているというところからくる無関心なのだ。絵画や彫刻の愛好家や、特定の趣味を満足させようと、オーテーションや骨董品店にたびたび出入りする博識家は大勢いるが、彼らにドアノックカードや暖炉の金具についてその魅力を尋ねれば驚かれてしまうだろう。【中略】ヨアヒム「ヨーゼフ・ヨアヒム、ハンガリー出身のバイオリー」の演奏を十分に理解することができても、機械仕掛けのオルガンで生み出されたメロディーを無関心に聴くことができたり、あるいはリズムと調子が狂つたピアノの演奏を平気で聴くことができたりする音楽愛好家についてどうお考えか？しかし、これはまさに、ロイヤル・アカデミーの展覧会でレイトン「フレデリック・レイト」とミレイ「ジエイ・アーヴィング」の作品を賞賛し、その後、店へ直行し、実際の美しさが欠けているだけでなく、明らかに醜い製品を購入し、自分たちの家を満たしている人々がしていることなのだ。【3】

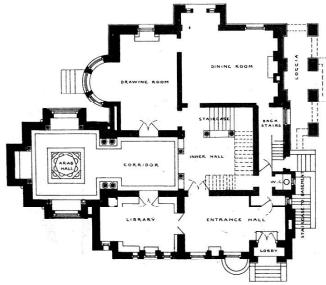
無関心からくる無批判な購買が、さらなる製品のレベルの低下を招いている、そこでは、人々のデザインの良し悪しを見分ける手助けとなるよう本書を著した、とイーストレイクは言う。街並みから始まり、玄関、床・壁、リビングルーム、と住まいの各部分や部屋について章立てし、そのなかで使われる家具や食器類、そしてファブリックや衣服に至るまで生活にまつわるさまざまなものについて言及した本書は、消費者のための手近なハンドブックとなっている【4】。

イーストレイク自身、建築を学び、『助言』出版当時は、英國王立建築家協会の秘書官を務めており、また一八七二年には、ゴシック・リヴァイアルについての書籍も出版するなど、彼はゴシック復興様式の擁護者であった【5】。そのため『助言』でも、とりわけ家具について、自分がデザインしたゴシック調のものをイラストで多数紹介している。しかし、前時代と比して緻密さや素材のよさといった点ではるかに劣る現代の製品に落胆し、ラスキンらが先鞭をつけた手わざの復興を動機づける思想を本文に反映しつつも、イーストレイクは厳格なゴシック復興様式の支持者というわけではなかった。一九世紀後半の生活や産業についての自身の見解を歪めてまで、中世の工芸品や中世の職人の技への愛好を押し通そうという考えではなかったのである。それは本書が、建築界におけるゴシック・リヴァイアルの変容、すなわち、リチャード・ノーマン・ショーラによつて一八七〇年頃に定式化された建築様式である、クイーン・アン復興様式への移行の徵候をいち早く捉えていたことにも関係するかもしれない【6】。また、美しい室内を彼がどのように考えていたかをうかがわせる次のようない文にも、流行を取り入れつつ、理想の住まいを語るという折衷的な一面が見えている。

簡素な方法で組み立てられた家具に、古い陶器の花瓶や珍しい磁器を飾るために、いくつかの奥行きの浅い棚が付け加えられている。ほとんどの家にはこうした棚がいくつもあるが、それが部屋の端に置かれたらなんと絵のように美しい外観を呈することだろう！【7】

ゴシック調の家具をはじめ、イーストレイクが『助言』のなかで推薦するものは、概して簡素で実用的という共通点が見られるが、それらに加えて、ここに書かれているような陶磁器だけでなく、象牙や金工品、七宝、ヴェネツィア・ガラスといったその他の工芸品について「良いデザインと熟練した技量を示すものであれば、可能な場合はいつも手に入れるべきであり、大切に保管」すべきで、それらが「眞に良い芸術を構成する要素を理解するため審美眼を養う上で及ぼす影響を評価しすぎることはない」と、これらを積極的に蒐集し室内に飾ることを肯定している点は興味深い。ここにはさらに「日本の扇」なども加わり、それらが「装飾的な形と色の貴重な教訓となる」と推奨し、それによつて「小さな美術館が形成され、所有者にとって永遠の喜びの源となる」と意義を語つている【8】。

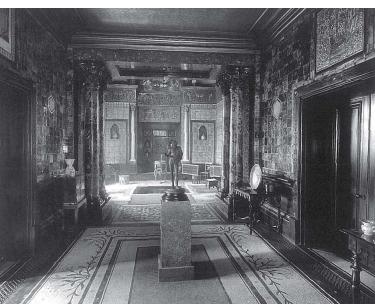
こうした語りのなかで気づくのは、後期ヴィクトリア女王時代の人々の住まいでは、間取りや構造といった問題ではなく、部屋のなかに置かれて生活をとりまくこうしたさまざまな「もの」が、室内空間を決定する重要な要素と考



ジョージ・エイチソン
レイトン・ハウス1階平面図、1880年
階段ホール（中央）から左へナルキッソス・ルーム、アラブ・ホール（左端）



ジョージ・エイチソン
レイトン・ハウス
階段ホールの眺め、1895年



レイトン・ハウス
ナルキッソス・ルーム（奥にアラブ・ホール）、1895年頃

室内装飾指南書の著書の一人、ホーウィス夫人による『美しい家』（一八八二年）にも取り上げられ、この時代に最も注目されたインテリアであった。

ベルリン、フィレンツェ、フランクフルト、ローマなどヨーロッパ各地を巡り絵画を学んだレイトンは、一八五九年に英国に戻り、英國画壇を発表の場として活動を始めた^[1]。美術のパトロンとしても知られるホランド夫人から、ホランド・パーク二番地の地所を一八六四年に得て、翌六五年後半から自宅の建設を開始した。建物の設計は、ローマで知り合い、イタリア芸術への共感を分かち合っていたジョージ・エイチソン George Aitchison Jr.（一八二五一一九一〇）に依頼した。一階に玄関とホール、ダイニング、ドローライングルーム、ブレックファストルーム、二階に寝室一部屋とバスルーム、スタジオ、地階にキッチンと食品庫、

この時代、「いかに住むべきか」という問題は、もう少し正確にいようと「いかに美しく住むべきか」という問題であった。

イーストレインクの『助言』は反響を呼び、多くの版を重ねた。さらに、類似のテーマで次々とインテリアと室内装飾に関する指南書が出版された。そうした本の中には、ローダとアグネス・ギャレット著『絵画、木工、家具の室内装飾への提案』（一八七七年）や、ホーウィス夫人著『アート・オブ・ビューティ』（一八七八年）、『装飾の藝術』（一八八一年）などがあった^[2]。

室内に置かれるさまざまなものについて細部まで言及し、それらの調和によって美しい住まい、美しい生活を実現しようとするイーストレインクの書物は、ゴシック復興様式を基調とする点でモリスらのアーツ・アンド・クラフトの思想と接点を結び、同時に、陶磁器や工芸品を飾る流行を肯定し、同時代の住まいにおける新潮流と響き合う。『助言』が出版された一八六〇年代、室内装飾の新潮流を生み出していたのが、ヴィクトリア女王時代の道德や教養など物語を表した絵画に対し、「主題のない絵画」すなわち唯美主義運動のなかで絵画表現を追究した一群の画家たちであった。この時代、画家たちも各自のスタジオ兼自宅（スタジオハウス）を新築あるいは大幅に増築するなどして、さるに中国陶磁器や日本趣味のコレクションで室内を飾った。ラファエル前派の画家ヴァランタン・プリンセプ Valentine Prinsep（一八三八一九〇四）をはじめ、ロイヤル・アカデミーの会長となつたフレデリック・レイトン、オランダ出身で一八七〇年代以降ロンドンに活動の場を移したローレンス・アルマ＝タデマ Lawrence Alma-Tadema（一八三六一九一）などの住まいがこの時代に出現している。ジャポニズムの画家ジェイムズ・マクニール・ホイットラー James McNeill Whistler（一八三四一九〇三）も新居の設計を新進の建築家エドワード・ウイリアム・ゴドワイン Edward William Godwin（一八三三一八六）に依頼し、その建築案は装飾のない新様式で注目された。

なかでもレイトンは、一八六〇年代半ばにロンドンのウエスト・エンド、ホランド・パークの南端に新居を構え、内装を調べており、一八七〇年代半ば以降にピークとなるこうした流行を牽引した一人であった。その家は、当時の

美の場所——レイトン・ハウス



美の場所の変容

一八八〇年にバーミンガムで行われた講演で、ウイリアム・モリスは「現代の文明の進路は生活の美を破壊する危険がある——これは強烈な言葉で、多少とも和らげらればとも思うが、私の信じるところを率直に語るためには、それは出来ない」¹³と人々に語りかけた。モリスのこの言葉に代表されるように、この時代、多くの人々が失われつ

| 図5
フレデリック・レイトン
『無言歌』
(1861年、テート・ギャラリー蔵)

ない、それは記憶であり、現代の眼をとおして見たヴィジョンなのです」¹²。

ホールや階段のここかしこで、飾られた工芸品や美術品を通して、さまざま時代や地域が呼び覚まされるが、あくまでそれらは同時代人の眼を通して見た「ヴィジョン」なのだとホーウィス夫人は述べる。レイトン邸のインテリアは、芸術家が異国への憧れから「異国」をそのまま再現させようとした気まぐれな試みではなく、現代人の視点で作り上げられた、現代のロンドンに住むある人物の空間として認識されていることに注目したい。

この「現代の眼を通して見たヴィジョン」という言葉は、レイトンが描く「主題のない絵画」を想起させる。衣服や画面に描かれる背景や細部によって古代ギリシャや中世、あるいは東方といった、ここではないどこか遠い世界を鑑賞者に想起させながらも、画面に描かれているのは、その時代に由来する宗教や文学を題材としたものでもなれば、またその土地で実際にを行った取材をもとにした情景でもない。レイトンによるこうした作品のもつとも早い例として、『無言歌』(一八六一年、テート・ギャラリー蔵、図5)が挙げられる。ドレープのある衣服をまとった物思いに耽る少女。その傍らにはギリシャの壺が置かれ、噴水からの水が注ぎこまれている。少女の後方、一段高い背景にも噴水が描かれ、その音に耳を傾けるかのように座っている少女の足下には、タイルが敷き詰められている。ここには、偶然にも後のアラブ・ホールを予言するような空間が描かれている。ここではないどこかを想起させつつ現代に生きる画家が思い描くヴィジョンを構築している点で、レイトンの住まいと絵画は相似を成しているように思われる。

給仕室等を備えていた。簡素なルネサンス風の外観と呼応するよう同じスタイルでまとめられた階段ホール、コローやドラクロアの作品やスケッチが飾られたドローイングルーム、重厚な梁がわたされた天井とオーラーのマントルピースのあるダイニングルームなどについて、建物がほぼ完成した当時の建築雑誌『ビルディング・ニュース』が伝えている。当初から、ヨーロッパ各地でレイトンが蒐集した絵画や工芸のコレクションを室内に飾ることを考えての設計であった¹⁴。

さらに一八七七—八年にかけて、一階の階段ホールから西側へ続くホールなどが増設された「図1～4」。とくに最西端のホール(アラブ・ホール)は、イタリア、パレルモのアラブ・ノルマン様式の宮殿のメイン・ホールを参考にして作られ、部屋の中央に噴水を置き、ドーム型天井の部屋の壁面は、レイトンがコレクションしたダマスカスやトルコの一五一七世紀のタイルで埋め尽くされた。アーツ・アンド・クラフトのアーティスト、ウイリアム・ド・モーガン William De Morgan (一八三九—一九一七)が、タイルの繋ぎ目や欠損などを補いながら、全体の配置を担当し、フリーズには、同じくアーツ・アンド・クラフトの画家ウォルター・クレイン Walter Crane (一八四五—一九一五)が、レイトンの注文を受けて特別に制作したモザイクがはめ込まれている。

アラブ・ホールの前室にあたる「ナルキッソス・ルーム」もド・モーガンによって焼かれた深い青色のタイルが壁全体を覆い、ところどころで古いシリアの六角形のタイルがアクセントとなっている。この流れで、階段ホールの壁面も同様のタイルで統一され、初期にはルネサンス様式が支配的だった室内は、イタリア、中東、そして同時代のアーツ・アンド・クラフトの作家のものまでが同一空間に同居するという特異まれな空間となつた。

レイトン・ハウスのアラブ・ホールは、芸術家の東方への憧れが生んだ「異国」だったのだろうか。この疑問に対して、ホーウィス夫人の言葉は示唆的である。彼女は、『美しい家』のなかで、スタジオへと続く階段ホールとそれに隣接するナルキッソス・ルーム、その奥のアラブ・ホールの三つを取り上げてこう述べている。「この家の主な特徴は、徐々にスタジオへと上がっていくこの階段と、ホールからまた次のホールへと続く一階の配置にあります。ここででは古代を、またこちらでは中世、そしてこちらではルネサンスのイタリアを呼び覚まし、フィレンツェからローマへ、ナポリそしてカイロへとくだつていきますが、それはローマではなく、シチリアではなく、またエジプトでも

つあった生活のなかの美に危機感を抱いていた。レイトン・ハウスもまた、この時代に人々が求めた動きに呼応する、画家という突出した感性と才能をもった人物による一つの反応であった。レイトンをはじめとする唯美主義の画家たちが構築したインテリア空間は、一種のお手本として、世纪後半の英國において広く人々のなかに浸透し、アーツ・アンド・クラフトの壁紙やタイルとともに、流行を加速させていった。初期の田園都市として知られるロンドン郊外のベッドフォード・パークは、ウォルター・ハミルトン（一八四一—一九九）の著書で、「唯美主義者の住まい」として取り上げられた住宅地であるが、その一角に立つノーマン・ショウによるアン女王復興様式の建物のインテリアに、ド・モーガンとクレインによるタイルが使われているを見ると、レイトン・ハウスの室内装飾のスタイルが瞬く間に、そして広範囲に広がったことを実感する^{*14}。やがてこの住宅地では、教会や住民同士の交流の場としてのクラブ、テニスコート、美術学校をもそなえ、美術学校では水彩画や油絵、金工や家具、ステンドグラスなどの装飾美術も学ぶことができた。いいやは、「美しく住むこと」が質的に読み替えられて、実際の住空間やコミュニケーション空間の快適さへと反映されてくるようになる。この後、近代の発展とともに、機械化やテクノロジーがさらに進化するにつれ、この「美の場所」は、「能率の場所」と変容していくことになる。

註

北村仁美（きたむら・ひみ）
東京国立近代美術館工芸課主任研究員。専門は近代工芸史。

註

^{*1} Charles L. Eastlake, *Hints on Household Taste in Furniture, Upholstery and Other Details* (Longmans, Green and Co., 1869), 2nd ed., 21.

^{*2} John William Mackail, *The Life of William Morris* (Longmans, Green and Co., 1901), Vol.1, 142.

^{*3} *Ibid.*, 122-123. 「 」内は筆者補足。

^{*4} 本書には、のを選べ側・使う側の審美眼を養いボトムアップを狙つゝも、ひいてはそれが自国のデザインのレベルアップに繋がると言える。一九世紀のデザイナーや改良者たちの思想も読み取る事ができる。

^{*5} Charles L. Eastlake, *A History of the Gothic Revival* (Longmans, Green, and Co., 1872)。鈴木博之氏はこの書を「ヴィクトリア朝建築史の最も早い試

^{*6} みる位置づけている。鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』(中央公論美術出版、一九九六年)二五〇頁。例えば、コシック・リヴァイアルを継承する現代の建築家たちについて述べた以下のようない文に折衷主義(クイーン・アン復興様式)の示唆を読み取ることができる。ただし『助言』第四版(一八七八年)の第一章最終段落加筆部分で、イーストレインは明確に「クイーン・アン」という言葉を用いる。But no such landmarks exist to indicate the several roads by which we have arrived, or hope to arrive, at aesthetic greatness in the reign of Queen Victoria. Our modern geniuses have struck out new paths for themselves, which here and there cross, indeed, the course of their predecessors, but rarely coincide with it. These are so diverse in their direction that they may be said to have formed a sort of labyrinth which by and by it will be difficult to survey. (p.29.)

Ibid., 75.

^{*7} *Ibid.*, 121-122.

^{*8} ^{*9} ^{*10} ^{*11} ^{*12} ^{*13} ^{*14} ^{*15} ^{*16} ^{*17} ^{*18} ^{*19} ^{*20} ^{*21} ^{*22} ^{*23} ^{*24} ^{*25} ^{*26} ^{*27} ^{*28} ^{*29} ^{*30} ^{*31} ^{*32} ^{*33} ^{*34} ^{*35} ^{*36} ^{*37} ^{*38} ^{*39} ^{*40} ^{*41} ^{*42} ^{*43} ^{*44} ^{*45} ^{*46} ^{*47} ^{*48} ^{*49} ^{*50} ^{*51} ^{*52} ^{*53} ^{*54} ^{*55} ^{*56} ^{*57} ^{*58} ^{*59} ^{*60} ^{*61} ^{*62} ^{*63} ^{*64} ^{*65} ^{*66} ^{*67} ^{*68} ^{*69} ^{*70} ^{*71} ^{*72} ^{*73} ^{*74} ^{*75} ^{*76} ^{*77} ^{*78} ^{*79} ^{*80} ^{*81} ^{*82} ^{*83} ^{*84} ^{*85} ^{*86} ^{*87} ^{*88} ^{*89} ^{*90} ^{*91} ^{*92} ^{*93} ^{*94} ^{*95} ^{*96} ^{*97} ^{*98} ^{*99} ^{*100} ^{*101} ^{*102} ^{*103} ^{*104} ^{*105} ^{*106} ^{*107} ^{*108} ^{*109} ^{*110} ^{*111} ^{*112} ^{*113} ^{*114} ^{*115} ^{*116} ^{*117} ^{*118} ^{*119} ^{*120} ^{*121} ^{*122} ^{*123} ^{*124} ^{*125} ^{*126} ^{*127} ^{*128} ^{*129} ^{*130} ^{*131} ^{*132} ^{*133} ^{*134} ^{*135} ^{*136} ^{*137} ^{*138} ^{*139} ^{*140} ^{*141} ^{*142} ^{*143} ^{*144} ^{*145} ^{*146} ^{*147} ^{*148} ^{*149} ^{*150} ^{*151} ^{*152} ^{*153} ^{*154} ^{*155} ^{*156} ^{*157} ^{*158} ^{*159} ^{*160} ^{*161} ^{*162} ^{*163} ^{*164} ^{*165} ^{*166} ^{*167} ^{*168} ^{*169} ^{*170} ^{*171} ^{*172} ^{*173} ^{*174} ^{*175} ^{*176} ^{*177} ^{*178} ^{*179} ^{*180} ^{*181} ^{*182} ^{*183} ^{*184} ^{*185} ^{*186} ^{*187} ^{*188} ^{*189} ^{*190} ^{*191} ^{*192} ^{*193} ^{*194} ^{*195} ^{*196} ^{*197} ^{*198} ^{*199} ^{*200} ^{*201} ^{*202} ^{*203} ^{*204} ^{*205} ^{*206} ^{*207} ^{*208} ^{*209} ^{*210} ^{*211} ^{*212} ^{*213} ^{*214} ^{*215} ^{*216} ^{*217} ^{*218} ^{*219} ^{*220} ^{*221} ^{*222} ^{*223} ^{*224} ^{*225} ^{*226} ^{*227} ^{*228} ^{*229} ^{*230} ^{*231} ^{*232} ^{*233} ^{*234} ^{*235} ^{*236} ^{*237} ^{*238} ^{*239} ^{*240} ^{*241} ^{*242} ^{*243} ^{*244} ^{*245} ^{*246} ^{*247} ^{*248} ^{*249} ^{*250} ^{*251} ^{*252} ^{*253} ^{*254} ^{*255} ^{*256} ^{*257} ^{*258} ^{*259} ^{*260} ^{*261} ^{*262} ^{*263} ^{*264} ^{*265} ^{*266} ^{*267} ^{*268} ^{*269} ^{*270} ^{*271} ^{*272} ^{*273} ^{*274} ^{*275} ^{*276} ^{*277} ^{*278} ^{*279} ^{*280} ^{*281} ^{*282} ^{*283} ^{*284} ^{*285} ^{*286} ^{*287} ^{*288} ^{*289} ^{*290} ^{*291} ^{*292} ^{*293} ^{*294} ^{*295} ^{*296} ^{*297} ^{*298} ^{*299} ^{*300} ^{*301} ^{*302} ^{*303} ^{*304} ^{*305} ^{*306} ^{*307} ^{*308} ^{*309} ^{*310} ^{*311} ^{*312} ^{*313} ^{*314} ^{*315} ^{*316} ^{*317} ^{*318} ^{*319} ^{*320} ^{*321} ^{*322} ^{*323} ^{*324} ^{*325} ^{*326} ^{*327} ^{*328} ^{*329} ^{*330} ^{*331} ^{*332} ^{*333} ^{*334} ^{*335} ^{*336} ^{*337} ^{*338} ^{*339} ^{*340} ^{*341} ^{*342} ^{*343} ^{*344} ^{*345} ^{*346} ^{*347} ^{*348} ^{*349} ^{*350} ^{*351} ^{*352} ^{*353} ^{*354} ^{*355} ^{*356} ^{*357} ^{*358} ^{*359} ^{*360} ^{*361} ^{*362} ^{*363} ^{*364} ^{*365} ^{*366} ^{*367} ^{*368} ^{*369} ^{*370} ^{*371} ^{*372} ^{*373} ^{*374} ^{*375} ^{*376} ^{*377} ^{*378} ^{*379} ^{*380} ^{*381} ^{*382} ^{*383} ^{*384} ^{*385} ^{*386} ^{*387} ^{*388} ^{*389} ^{*390} ^{*391} ^{*392} ^{*393} ^{*394} ^{*395} ^{*396} ^{*397} ^{*398} ^{*399} ^{*400} ^{*401} ^{*402} ^{*403} ^{*404} ^{*405} ^{*406} ^{*407} ^{*408} ^{*409} ^{*410} ^{*411} ^{*412} ^{*413} ^{*414} ^{*415} ^{*416} ^{*417} ^{*418} ^{*419} ^{*420} ^{*421} ^{*422} ^{*423} ^{*424} ^{*425} ^{*426} ^{*427} ^{*428} ^{*429} ^{*430} ^{*431} ^{*432} ^{*433} ^{*434} ^{*435} ^{*436} ^{*437} ^{*438} ^{*439} ^{*440} ^{*441} ^{*442} ^{*443} ^{*444} ^{*445} ^{*446} ^{*447} ^{*448} ^{*449} ^{*450} ^{*451} ^{*452} ^{*453} ^{*454} ^{*455} ^{*456} ^{*457} ^{*458} ^{*459} ^{*460} ^{*461} ^{*462} ^{*463} ^{*464} ^{*465} ^{*466} ^{*467} ^{*468} ^{*469} ^{*470} ^{*471} ^{*472} ^{*473} ^{*474} ^{*475} ^{*476} ^{*477} ^{*478} ^{*479} ^{*480} ^{*481} ^{*482} ^{*483} ^{*484} ^{*485} ^{*486} ^{*487} ^{*488} ^{*489} ^{*490} ^{*491} ^{*492} ^{*493} ^{*494} ^{*495} ^{*496} ^{*497} ^{*498} ^{*499} ^{*500} ^{*501} ^{*502} ^{*503} ^{*504} ^{*505} ^{*506} ^{*507} ^{*508} ^{*509} ^{*510} ^{*511} ^{*512} ^{*513} ^{*514} ^{*515} ^{*516} ^{*517} ^{*518} ^{*519} ^{*520} ^{*521} ^{*522} ^{*523} ^{*524} ^{*525} ^{*526} ^{*527} ^{*528} ^{*529} ^{*530} ^{*531} ^{*532} ^{*533} ^{*534} ^{*535} ^{*536} ^{*537} ^{*538} ^{*539} ^{*540} ^{*541} ^{*542} ^{*543} ^{*544} ^{*545} ^{*546} ^{*547} ^{*548} ^{*549} ^{*550} ^{*551} ^{*552} ^{*553} ^{*554} ^{*555} ^{*556} ^{*557} ^{*558} ^{*559} ^{*560} ^{*561} ^{*562} ^{*563} ^{*564} ^{*565} ^{*566} ^{*567} ^{*568} ^{*569} ^{*570} ^{*571} ^{*572} ^{*573} ^{*574} ^{*575} ^{*576} ^{*577} ^{*578} ^{*579} ^{*580} ^{*581} ^{*582} ^{*583} ^{*584} ^{*585} ^{*586} ^{*587} ^{*588} ^{*589} ^{*590} ^{*591} ^{*592} ^{*593} ^{*594} ^{*595} ^{*596} ^{*597} ^{*598} ^{*599} ^{*600} ^{*601} ^{*602} ^{*603} ^{*604} ^{*605} ^{*606} ^{*607} ^{*608} ^{*609} ^{*610} ^{*611} ^{*612} ^{*613} ^{*614} ^{*615} ^{*616} ^{*617} ^{*618} ^{*619} ^{*620} ^{*621} ^{*622} ^{*623} ^{*624} ^{*625} ^{*626} ^{*627} ^{*628} ^{*629} ^{*630} ^{*631} ^{*632} ^{*633} ^{*634} ^{*635} ^{*636} ^{*637} ^{*638} ^{*639} ^{*640} ^{*641} ^{*642} ^{*643} ^{*644} ^{*645} ^{*646} ^{*647} ^{*648} ^{*649} ^{*650} ^{*651} ^{*652} ^{*653} ^{*654} ^{*655} ^{*656} ^{*657} ^{*658} ^{*659} ^{*660} ^{*661} ^{*662} ^{*663} ^{*664} ^{*665} ^{*666} ^{*667} ^{*668} ^{*669} ^{*670} ^{*671} ^{*672} ^{*673} ^{*674} ^{*675} ^{*676} ^{*677} ^{*678} ^{*679} ^{*680} ^{*681} ^{*682} ^{*683} ^{*684} ^{*685} ^{*686} ^{*687} ^{*688} ^{*689} ^{*690} ^{*691} ^{*692} ^{*693} ^{*694} ^{*695} ^{*696} ^{*697} ^{*698} ^{*699} ^{*700} ^{*701} ^{*702} ^{*703} ^{*704} ^{*705} ^{*706} ^{*707} ^{*708} ^{*709} ^{*710} ^{*711} ^{*712} ^{*713} ^{*714} ^{*715} ^{*716} ^{*717} ^{*718} ^{*719} ^{*720} ^{*721} ^{*722} ^{*723} ^{*724} ^{*725} ^{*726} ^{*727} ^{*728} ^{*729} ^{*730} ^{*731} ^{*732} ^{*733} ^{*734} ^{*735} ^{*736} ^{*737} ^{*738} ^{*739} ^{*740} ^{*741} ^{*742} ^{*743} ^{*744} ^{*745} ^{*746} ^{*747} ^{*748} ^{*749} ^{*750} ^{*751} ^{*752} ^{*753} ^{*754} ^{*755} ^{*756} ^{*757} ^{*758} ^{*759} ^{*760} ^{*761} ^{*762} ^{*763} ^{*764} ^{*765} ^{*766} ^{*767} ^{*768} ^{*769} ^{*770} ^{*771} ^{*772} ^{*773} ^{*774} ^{*775} ^{*776} ^{*777} ^{*778} ^{*779} ^{*780} ^{*781} ^{*782} ^{*783} ^{*784} ^{*785} ^{*786} ^{*787} ^{*788} ^{*789} ^{*790} ^{*791} ^{*792} ^{*793} ^{*794} ^{*795} ^{*796} ^{*797} ^{*798} ^{*799} ^{*800} ^{*801} ^{*802} ^{*803} ^{*804} ^{*805} ^{*806} ^{*807} ^{*808} ^{*809} ^{*810} ^{*811} ^{*812} ^{*813} ^{*814} ^{*815} ^{*816} ^{*817} ^{*818} ^{*819} ^{*820} ^{*821} ^{*822} ^{*823} ^{*824} ^{*825} ^{*826} ^{*827} ^{*828} ^{*829} ^{*830} ^{*831} ^{*832} ^{*833} ^{*834} ^{*835} ^{*836} ^{*837} ^{*838} ^{*839} ^{*840} ^{*841} ^{*842} ^{*843} ^{*844} ^{*845} ^{*846} ^{*847} ^{*848} ^{*849} ^{*850} ^{*851} ^{*852} ^{*853} ^{*854} ^{*855} ^{*856} ^{*857} ^{*858} ^{*859} ^{*860} ^{*861} ^{*862} ^{*863} ^{*864} ^{*865} ^{*866} ^{*867} ^{*868} ^{*869} ^{*870} ^{*871} ^{*872} ^{*873} ^{*874} ^{*875} ^{*876} ^{*877} ^{*878} ^{*879} ^{*880} ^{*881} ^{*882} ^{*883} ^{*884} ^{*885} ^{*886} ^{*887} ^{*888} ^{*889} ^{*890} ^{*891} ^{*892} ^{*893} ^{*894} ^{*895} ^{*896} ^{*897} ^{*898} ^{*899} ^{*900} ^{*901} ^{*902} ^{*903} ^{*904} ^{*905} ^{*906} ^{*907} ^{*908} ^{*909} ^{*910} ^{*911} ^{*912} ^{*913} ^{*914} ^{*915} ^{*916} ^{*917} ^{*918} ^{*919} ^{*920} ^{*921} ^{*922} ^{*923} ^{*924} ^{*925} ^{*926} ^{*927} ^{*928} ^{*929} ^{*930} ^{*931} ^{*932} ^{*933} ^{*934} ^{*935} ^{*936} ^{*937} ^{*938} ^{*939} ^{*940} ^{*941} ^{*942} ^{*943} ^{*944} ^{*945} ^{*946} ^{*947} ^{*948} ^{*949} ^{*950} ^{*951} ^{*952} ^{*953} ^{*954} ^{*955} ^{*956} ^{*957} ^{*958} ^{*959} ^{*960} ^{*961} ^{*962} ^{*963} ^{*964} ^{*965} ^{*966} ^{*967} ^{*968} ^{*969} ^{*970} ^{*971} ^{*972} ^{*973} ^{*974} ^{*975} ^{*976} ^{*977} ^{*978} ^{*979} ^{*980} ^{*981} ^{*982} ^{*983} ^{*984} ^{*985} ^{*986} ^{*987} ^{*988} ^{*989} ^{*990} ^{*991} ^{*992} ^{*993} ^{*994} ^{*995} ^{*996} ^{*997} ^{*998} ^{*999} ^{*1000}